

〔『法学新報』第26巻8（300）号 大正5年8月30日〕

演説

○卒業生諸君を送る

此一編は去る七月六日挙行の中央大学第三十一回卒業式に臨み奥田学長か卒業生諸君に与へられたる訓示演説の速記なり今や博士の訂正を仰きて茲に掲ぐるものとせり

（記者識）

法学博士 奥田義人

私は先づ来賓各位に対して一言御挨拶を申し述べます。各位には御多忙の御身柄であり又本日は中中の暑さであるにも拘らず厚き御同情を以て御繰り合せ御来臨を辱うしたるは誠に本学の光榮とする所であります。由来本学は明治十八年の創立ではあ

りまするか卒業証書授与式を行ひますことは今回て三十一回になります。初度の卒業証書授与式を行ひましたのは真に昨の様でありませうけれども早や既に三十一年前の昔であつたかと思へは恰も夢の様な感か致します。当時は本日卒業証書を受けた人は未だ此世に生まれ居られなかつたのは勿論私の如きも今こそは半白已上の老人でありますもの其当時には二十六七歳の青年て血氣盛りの時代でありましたか生意氣にも先輩の驥尾に附いて講師の末席を汚かして居りましたけれども其実は学生の友達であつて共に遊び共に飲むて居つた様な始末で中中愉快でありました。既往三十一年間には時勢の推移に伴ふて本学にも亦種種の変遷はありましたか内に在りては先輩諸氏の熱心なる努力があり外に在りては今日御来臨下されたる各位の様な方方が直接又間接に厚き同情を寄せられた御蔭で年を追ふに従ひ内容が充実し基礎も亦鞏固となつて既に六千有余の卒業生を出し遂に今日の隆盛を見るに至りました次第であります。故に私は此機会に於て先輩諸氏の労苦を謝すると同時に来賓各位に対し本日御来臨を辱くしたる御礼に併せて既往の御同情の厚かりしに付き篤く御礼を申し上げます。尚ほ此上なから将来に向ても一層の御同情を賜はらむことを希います

次には卒業生諸君に対し例に依り告別旁々一言したいと考へます。諸君には今より三年前に本学に入り或は法律学に或は経済学に或は商業学に各々其欲する所に従ひて研究練磨の功を積まれ所定の課程を履み試業を完うして茲に卒業証書を受くるに至られたのは諸君に取りては素よりお目出度ことであり私に於て

も亦何より喜はしく思ふのであります。一年に一度の試験であつて在学中僅かに三度の試験ではありますけれども私にも経験がありますか試験ほと厭なものはない。併し私共が試験で苦しめられました時は今時の様に細かい問題で苦しめられたことは先づなかつたと覚へます。大学に居りました時にたつた一度日本古代法の課目で東海道各駅に於ける駄賃の割合如何と申す様な問題を出されて頗る当惑を致したことがあつて三十有余年後の今日に於ても其れが尚ほ脳裏に残つて忘れられませぬのみて其外は大抵大體論的の問題でありましたから何も講義に聴いた細いことを一一記憶して居らぬからと申しても図書館に入つて種々な書冊を読み一般の知識を蓄へて置きますれば夫れて可なり答案も作ることが出来ました様に覚へて居ります。今時は之れと異なつて講義に聴いた細いことまで一一記憶して居らすでは中中危険である。夫れ故に帝国大学などでも先生方の講義の秘密出版が行はれて其出版物が頗る高価であるに拘らず羽の飛ぶか如くに売れて為めに或る書籍店は大利を占めたと申す噂も聞いて居る様な次第であつて世の中の抜目のないのにも驚くか試験は学生に取りては実に苦痛なもので今時は別して其苦痛が増して居ることを証拠立てる様であります。諸君は即ち此苦痛を嘗めて今日に至つたものであるから私は同情に堪へないのであります。去りなから今後数年を経過すれば諸君は必ず学校に居つた時のことを思ひ出してなつかしくなるのは受合つて置きます。其訳は外ではない諸君が是れより實際の社会に出て御覧になると中中以て学校に在つた時の試験の苦痛所の話してはな

い種種雑多なる困難に遭遇せらるるからであります。古人か人生行路の難を或は文章或は詩歌等に訴へて居りますか是れは決して虚てはないと考へます。諸君は今書生の境遇を離れたからと云ふて迎も一生涯の間気楽をすることは出来ぬものと覺悟して居られずては實際の社会に立つて行くことは六ヶ敷いと思ひますから若し其覺悟のない人があるなれば今の内に山の奥にても隠れて仕舞ふた方が安全でありまじやう。社会との關係は別として諸君が其一身丈けのことに就て想像して見られても能く分つた話してあつて是れから辛うして生活する丈けの工夫か付いたとしてももう相当の年頃であるから妻帯もせられなくてはならぬ。妻帯するとなれば従來の如く下宿屋の四畳半の二階でも済まぬから親許に在つて其恩沢に浴するか又は親譲りの家でもあれば格別左なくは相当家賃を出して住宅も構へすてはならず。彼此する内には小供か生まれる。一人て止まれはまたしも三人も四人も段段と殖へて呉る。成長するに従て相當に教育を受けさせずては親の義務か立ち兼ねる。小供の教育も昔時の寺子屋流儀には參らぬから其負担計りても容易ではない。其内には総領息子によめか必要になつたり総領娘は他に嫁せしめずてはならぬことに立ち至る。間もなく孫か産れて来ると申す様な順序で進行するものでありますから其間の苦痛計りても学校時代に於ける試験の苦痛と比へものになつたものではないと心得ます。而して更に進むて一身一家と社会との關係は如何であるかと考へて見ますれば一層複雑で一層困難である。親族や友達間の附合丈けなれば兎も角も如何なる業務に従事して

も其業務に関連して厭やなと思ふ附合もなさずてはならず。感服はしなくても頭を下げなくてはならぬ必要も生じて来るし。人に使はれれば無理だと思ひながらも叱られて居らなくてはならぬこともあるし。人を使ふても自から思ふ様に中働いて呉れず。されはと云ふて無暗に叱り付くれは不平が多くなつて愈々動かなくなるし。其内には猜疑も起れば中傷も生し種種なる妨害か加へられて来る杯虚心平氣で考へて見れば社会の実際は実に不思議千万なものと思はるるけれども是れか常態から致方かない。諸君は即ち是れから此間に立ちて一身を処し一家を維持して參らなくてはならぬのであるから其苦痛か迎も試験の苦痛所でないことは明かてあります。して見れば今日は卒業証書を受けられてお目出度様であるけれども前途のことを考ふれば中お目出度ないと申しても差支へはありませぬ

然れども翻つて考へて見れば斯様な困難もあり斯様な苦痛があるから人も勉強し此困難や苦痛に対抗するの勇氣を鼓舞する様になつて其人も發達し延いて社会も亦進歩する様になるのである。夫れ故に古から人には忍耐が必要である忍耐力の乏しい人は事を遂げられぬと教へてありますし又謀事難成則永久とも教へてあつてどうしても社会に立ちて行くのには忍耐力がなくてはならぬ其代りには忍耐に忍耐を重ね夥多の困難を経て事を遂げたときには其事たるや必ず基礎か堅くて容易に動かされる様なことはないものである。世の中に成金などと称して一夜造りの富豪か出来ても忽ちに破るるのは即ち此天理に基づくのである。諸君は決して一夜造りの成金などを夢みる様なことかあ

つてはならぬ。どこまでも堅実な志を以て社会の苦痛困難に耐へて能く一身一家を整へ延いては社会国家の爲めに犠牲になつて尽くして貰はずてはならぬことと考へますし又私は斯くありたいものであると切に希望を致すのであります。而して終りに臨みて尚ほ一言したいのは諸君か社会に立たるるに當つては平素其行に最も注意せられずてはならぬ。古人も「行高ければ人自ら重むす其貌の高きを必とせず」と申して居ります。尤も行か高い計りても其人に才かなくては活動は出来ぬものであるから素より才も之れに伴はずてはならぬ。言の高きは必ずしも諸君に望む所ではありませぬ。今諸君と別かるるに當りて所感の一端を述へて告別の辞に代えます。諸君之れを諒せられよ

○人格に付て

此一編は去る七月六日挙行の中央大学卒業式に於て演せられたる祝辞の速記なり博士の校訂を得て茲に掲載することとせり(記者識)

文学博士 高楠順次郎

諸君は多年御修学の功を御積みになりましたして今日は目出度御卒業になりました、何か一言御祝辞か申したいのでありますか、御承知の通り私の専門と諸君の専門とは非常に懸け離れて、果して今日の盛大の御式に相当する祝福の辞か述へられるかどうか私自身も疑ひます、併し学科の離れて居ると云ふことは見やうに依ては一樣に見ることも出来るのであります、英国の大学では法学と医学と神学と三つの学科は一層高尚なる学科として

取扱ひます、それて之を特別に他の分科並に理文科の学科と異にしてそれより上に位するものとしてあります、文科理科を卒業すれば「マスター、オフ、アーツ」と云ふ学位は得られるか「ドクトル」と云ふ学位は得られない、所か此法医神の三つに於ては「ドクトル」の学位を受けることか出来る斯う云ふ工合になつて居ります、殊に此三つの学科か社会を救済する、或は身体の点に於て或は人權の上に於て或は精神の問題に於て社会を救済する点に重きを置いて居る、此三つは高尚な学科として取扱つて殊に高等分科「ハイヤー、フツカルチャー」と云ふ名を置いた、併し段段独逸の学風か圧迫して来まして終に最近に於て此風は殆んど破れて了ひました、そうして文科も理科もやはり今の三学科と同じやうな風に扱はれるやうになつた、併し英吉利は相変らず三学科には同様に重きを置いてありますからして、此三学科は社会を救済する非常なる意味を持つたものとして取扱ふのか便宜としてあります、所か段段世の中か末になりますとさう云ふ訳に行かない、何れの方面にも影響か生じて来て商売の為に法律を学ふやうになり、医者も商売の為にするやうになつて来る、甚しきは宗教も亦自分の生活の為に之を職業とするやうになつて来たのである、段段斯う成り下つて来ますと遂に其学科は元は高尚の学科として貴はれて居つたのもどうもさう云ふ工合に行かないやうになつて来る、若し之を救ふ道かなかつたならば恐るべき結果となるてありまじやうけれども亦此所には救はれる道かある、どう云ふ所て救はれるかと云ふと、学科は幾ら墮落して来ても、一般からどう低う見られて

居つても、茲に一つの救ひの道かある、それは此学科を運用する人か本統の人格の人てあつたならば其人格に依て学科の墮落は救はれるのであります、さうして見ると学科は低うなつても人格か高いと此学科も遂に社会の救済を主として居ると云ふ意義を完ふする事か出来るのであります、幾ら学科か高尚でも人格か低くかつたら其学科をして遂に墮落せしむるに至るのである、此点か私は余程注意しなくてはならぬものと考へます、諸君は今まで此人格の完成、或は学科の力に依り或は訓練の力に依て人格の完成を得る道を辿つて来られたのである、此人格の完成と云ふことは今日を以て終を告げたのである、今後は此人格を以て社会に処する人格の生活をなさるのである、今日は其始めである、亜米利加の言葉では卒業式を「コンメンズメント」と言つて居る、学校の卒業のことを「コンメンズメント」即ち「始め」と云ふ名前を附けたのである、是は即ち人格の完成と云ふことは既に終つたのである、けれども人格生活は是から始まると云ふ意味で「コンメンズメント」と云ふのであらうと思はれます

人格と云ふものか非常に重いものであると云ふことは私か今説法するまでもない諸君は御承知てありませうか、人格に依て総ての事か生きて来る、総ての学科、総ての学問、総ての宗教、社会の有ゆる事物は人格に集中しなくては皆嘘であるどんな事柄でも高尚の人格に集中すると云ふ一つの素質かなくなつたならば全く嘘偽であつて、人生の目的に於ては寸分の効能もないものと私常に考へて居ります、仏教などは常に高尚な空論に馳

せて遂に空空寂寂其帰する所を知らなくて終はる有様であります、けれども之に依る精神修養の力か遂に人格の實際に実現するので、空空寂寂の議論も遂に空空寂寂にあらず、實際の社会に実益をなすやうになるのであります老子の如きは大言壮語、恒に空論を事としまして議論に於ては此上もない高尚な方向を取りましたけれども、遂に實際生活に現れなかつたからして何にもなりません、老子は支那の西の方に向つて去り遂に行く所を知らぬといふ有様であります、老子の議論は非常に高くて立派だけれども人格の實際に現はすと云ふことを考へなかつたので、實際主義の支那の国には容れられなかつたものと私は思ふ、それに反して釈迦如来の如きは印度で生れて印度は歴史のない国であるから委しいことは分からねぬか、其説く所は終に空空寂寂で高尚であつたか恒に人格中心主義で人格の實際に現して社会生活に重きを為したと云ふことは最も吾吾の注意しなければならぬ点であると考へる、諸君の人格生活は今日を以て始まると今学長は述べられた、具体的に人格生活の困難を述べられましたから私は既に其方面に一語を添えることも出来ませぬ、之を抽象的に述べて此義務を果さうと思ひます

人格生活の初めは活動であります、活動にも色々ある、少くとも個人的活動と社会的活動と宇宙的活動との三種がある、範圍の大小の差はあるか何れも一つの理想である、之を以て兎に角活動を初めるのである、人格生活は初めは活動を以て始まりますけれども、人格生活の最後は何て終らなければならぬかと云ふに、人格生活の最後は自覚を以て終らなければならぬ、或

は個人的の自覚或は社会的の自覚又は宇宙的の自覚と云ふ差はあるか、何れかの自覚を以て終らなくては人格生活の目的は達せられぬ、そして人格は今日で完成致しましても人格生活は是からか初めて此所で人格活動が始まつて其終りは自覚を以て終らなくてはならぬ、之か諸君の本分である、諸君は是から進んで行かれるは或程度までは自覚と云ふものは誰でも得られるのであります、そこで問題は是から後人格生活かどの位な程度で以て終つて了うか、どの位な自覚で人格生活か終を告げるかと云ふことが問題である、普通一般人の間では普通人格を以て終つて了う人もありませう、けれどもどうしても普通人には企て及ふ事の出来ないといふ超越人格に進み得る人もありましてやう、社会的に超越する人もあり、国家的に超越する人もあり、又宗教的に宇宙に超越する人もある、だからして兎に角超越人格を以て終ると云ふことか一つの目的であります、普通の人格で終はるか超越人格で終はるか云ふことか問題である、私に思ふままに心底を告白することを許さるるならば、人間は単に普通人格若くは超越人格に終るのではない、絶対人格と云ふものかなくてはならぬ、また之れまで進まなくてはならぬと思ふ、宇宙の人、世界の人、天から見ても地から見ても之に企て及ぶことか出来ない、吾吾の有限の心力では想像し得ぬと云ふ底の地位にある人格かなくてはならぬ、是は絶対的人格と名づける、そして人格は普通人格、超越的人格から最後の絶対的人格にまで達することか出来ると云ふことを先づ第一に予想しなくてはならぬと思ふ、斯う云ふ方面に吾吾を向けて、常に我我をして

向上せしめんとして居るものは世間に沢山ある、即ち斯う云ふ方面に向つて材料となるものが沢山あります、先づ差当り法律の如きには最も人格の向上に力のあるものと考へられる、併し法律と云ふものは国家と個人との間の約束である我我の行為の結果を律して我我を向上せしめんとして居るのであるけれども、吾吾に向上の道を教へて呉れて居るものはまだ外にある、倫理と云ふものがある、倫理は實際個人と個人との間の道を教へるのである、之は行為の動機即ち意志を制して我我に向上の道を教へて居る、宗教と云ふものは又立場が違ふ、絶対と個人との間の關係を教へるものである、それだからして宗教は絶対が根本的理想となつて居る、倫理は吾吾個人を本位として居る、法律は国家若くは社会が其根本の主義となつて居る、斯う云ふ工合にいろいろ方面は違ひますけれども結局は人格を完成し得る道を教へる、向上の道を教へるの學問であると思ふ、それで宗教の必要と云ふものは私かあなた方に説法をしないで分つて居ることであるか、抑も宗教か社会に必要であると云ふことは一番高い絶対人格を教へると云ふ所にある、吾吾か進んで行くことの出来る最後の絶対的理想、宇宙的自覚まで進んで行く道を教へるのか宗教である、宗教はなせ必要であるかと云ふと、吾吾の理想と云ふものは其時に依て変はる、其地位によつて変る、変はらなくては理想ではない、是か変はらなかつたら吾吾は進歩しない、我我か普通人格である間は之に相当した理想で宜しいけれども、幾多の階級に在る比較的高等の人格さでは超越的人格に至るまでを支配する理想と云ふものはどうし

ても絶対位的人格でなければならぬ、絶対的理想と云ふものでなくては社会を物質的にも精神的にも向上せしむることは出来ない、社会の向上する点に於て絶対的理想と云ふものが必要である、併し諸君は極めて實際主義の方面に進んでお在てになるのであるから、是から後にも人格生活の極めて實際的の方面に向はるるのは必然である、故に私はそれまでの無理な注文はしないけれども斯う云ふやうな自覚の道があると云ふことを心得て物質的に進むと同時に精神的に進むと云ふ点まで進んで戴きたい、是か人格生活に一番大切なことであらうと思ふ

今若し人格をさう云ふ工合に修養した上はどう云ふ結果を得られるであらうかと云ふことは問題であります、人格の修養と云ふものは吾吾の個人の上に現れた其姿は見ることも説くことも出来ないのである、併しなから吾吾は感ずることか出来るものと思ふ、或人に逢つた時に千言万語議論の妙を極めるのを聞く、議論には服するか其人にはどうしても感服しないと云ふことかある、又或人に逢つた時は何にも言はないけれども唯暫らく其人に対して坐つて居ると遂に其人か慕はしくなつて感服することがある、一言の教へてそれか百世の師となすに足ると思ふ程の人もある、面と向つて見ては何方もちよつとも優劣はないやうに思ふけれども、どうしても同じ人とは思はれぬ、何方か自分の氣に入つたと云ふやうな感しのことかある、総てさう云ふものでありまして吾吾か其人に対した時にはどうして一つの引力がある、磁石の如き力がある、是は私は「ラヂア

ム」てあらうと思ふ、「ラヂアム」と云ふものは常に其分子を放散して自分の光となつて現はれる熱となつて現はれる、さう云ふ工合に吾吾は「ラヂアム」かあつて交互に之を放散して居るのである、其「ラヂアム」か衝突しては「ドングリ」の脊較へて何にもならないか、もつとより以上の人か来ると云ふと其「ラヂアム」の放光に依り其人に遂に感化される、此方か病的になつて居る所を直して引上げる実力か其人に現れて来るのである、此頃ダゴールと云ふ人か来ましたか、其人は実に斯う云ふ実例に最も適した人である、私は一体印度人には感服しない、印度人には沢山接しましたか余り感服した人はないか、ダゴール氏に対しても私は疑の眼を以て印度人であるから一般の失望を以て別れることと思つた、所か一般の人間でない、私か初めて逢つた時、まだ言葉は交はさないのにも他の印度人に見るへからさる所のあることを感じた、能く考へて見て私は他の西洋人て此位の人間かあるたらうかと思つた、是は唯思想か勝れて居るはかりてはない人格を持つて居るからであらうと思つた、私は疑の眼を以て逢ふた後には遂に此人は世界の人間て普通の印度人とは違つと云ふ（マゴ）こを感じた、所て日本の学者て此人を批評する者か沢山ある、それは極めて浅薄極まるもので、何かダゴールに就て話をして呉れと言はれて何か言はなくてはならぬとも思つたのか、其話は皆一夜作りて浅薄なものである、それを見ると日本の学界、日本の社会と云ふものは一つのダゴールと云ふ人間すら解釈することか出来ないかと云ふことを遺憾に思ふ、私は此浅薄な批評、此杜撰な言葉を若し一ダゴール

ルに見せたらどう思ふてあらうか、倫敦でダゴールか批評せられた言葉と日本の学界てあびせたダゴールの批評の言葉とを較へたら雲泥の差がある、とても較へものにならないオイケン（オイケン）を礼を厚うして迎へんとした日本でありますから私もそんなに多くは望まない、併ながらダゴールと云ふ一印度人に対してはもつと肯綮を得た批評かして貰ひたい、我学界の浅薄なことを言はうと思つて今日参つたのではない、少し脱線の気味でありますか、此ダゴールと云ふ人に対しては私は「ラヂアム」の感しか余程ひどく私の頭に起つた、私はダゴールの前に行くとき非常に引付けられるやうな感しか自然に起る、人にはさう云ふ生れなからにして人格の元素を備へた人がある、さう云ふ工合に「ラヂアム」と云ふものか常に互に放散されて居る、吾吾の人格の値打は何所かに発見されるものであると私は考へる、それを申上げるのは外てはない、私の希望は諸君と吾吾は同しく人格生活をして行くのでありますから、どうか人格の人として多少値打のある人となり普通の人格を超越した人となるやうにと云ふことか私の主眼であります、私は今「ラヂアム」と申しましたか、絶対人格てはこれは光明と云ふのである、普通に神や仏の光明とか後光とか云ふものは即ち人格の現はれてある理想の体現した結果である、吾吾は互に社会生活をする上には人に悪い感しを与へるやうな「ラヂアム」は放散しないやうに生活したいものたと思ふ、「ラヂアム」か少くて零点以下であると却つて消極的放散をするやうになるのである、余り長く悪い「ラヂアム」を放散致しましては済みませぬから私の祝辞は此

位に止めます

私は此大学に是と云ふ因縁はないか、唯曾て予備科を設ける時に今の学長奥田博士から依頼されて組織したことかあるのみであります、けれども卒業生及関係の各方は同国の人もあり、同国と同じやうに御交際を辱くして居る人も沢山あり、之を一つの誇りとして居ります、夫故に恰も故郷に來たと申すまでは行きませぬても之に似た感しかするのであります、で私の希望を述べましたのも諸君の将来も私の将来と同じやうに感じますから述べた同情の言として受取つて戴きたい、どうか将来は人格生活の歩調を一に行きたいと云ふのか私の希望であります(拍手)